始

11279
77

原始文様集解説

第七輯

(61) 壺形土器

口部に缺失あり。比較的厚手にして、面を磨けり。施文にあたりて、四ヵ巴文に似たる文様を描いて、地の部を一段と彫りくぼめ、而して巴の手にあたるところに、丹を塗れり。(圖版初本に着彩を示さんとせしが、地の部との堺線を白く抜きし為め質感を幾分害せるが如し) 我が國に於いて、巴文の盛行せしは藤原時代より以降にあるも、原始文様としてこが世界各地の原始民に使用せられし事實に徴しても、上代文様に原始的巴文のものあるを肯定し得べく、更に石器使用人の間にも、これが用ひられし事實を推知し得べく、一面、之を單に一種の曲線文をなすも亦可能なるべく、之が決定は後日に留保すべきものならん。

(62) 瓢形土器

高さ六寸二分、口徑二寸一分あり。外形、瓢形をなせるを珍とすべく、口緣部は波狀となる。文様は、縄文地に、浅き弧を横に三つ連ね、更にその下に横軸を中央として反對の方向に同様に弧を並べ、之を漸次下に繰返し、只、瓢形の中央、結れ目を廣く彈狀に取り、すべて其の中を、磨り消したり。而してその磨り消せる部分に、朱を塗りしが今なほ點々、そこに朱の附着せるを見る。

(63) 瓶形土器

その外形に於いて驚へるのみならず、文様の尤なるに於いて、他を壓すものあり。卽ち口部及肩部は、凸起せる帶文にて形に變化を與へ、文様は腹部にのみ施せり。帶文様にして、上下二帶、之が繰返しをせず、反覆せず、所謂羽式に見る曲線を驅使して、巧みに空間を塡充せり。手法、磨り消し文の中に於いて巧妙の極に近つきしもいふべきか。

(64) 家形土器

常陸國稻敷郡大須賀村福田字墓師臺發見、外形に於いて頗ぶる注意すべきものあり。卽ち形狀、稍ゝ砲彈に似たるものあるも、下底部を缺損して完形を知るべからず、かつ現存部の大きさ、高さ七寸許、底徑三寸の小形にしてかつ上部尖圓部にならんとするところに、扁圓形の一孔を設け

大正
13. 6. 28
内交

しは、何を象りしものならんか。全く模倣せし原物なく想像になれる一種の容器なりと假定し得べきも、反面、何物かを象りしものとせば、余輩はその原物が、當時に於ける一種の家にあらざるかといふ想像の可能なるを覺ゆ。事はとまれ、文樣は帶狀に上下區劃せしところに、半圓及缺圓を連ね、更に之と反對の向き合ひに、半圓を連ねて之を前半圓列と組み合せ、その間の上に點文を押し連ねたり。

(65) 鉢形土器

厚手なり。圖版向つて右は、腹部の文樣を示し、左は置物を下斜めに示せり。拓本に示すが加く、四等分して四弧及その五弧は共に並行線を以て帶狀となし、その間に箆先き以て蹴つて點文を連ねたり。大樣に施文せるところ、亦見るに足る。

(66) 壺形土器

文樣は主として、肩腹部に施されたり。卽ち上端に二平行線を引き、その下に間を廣くあけて三平行線を描き、その下に更に三平行線を添へ、上部の二つの平行線間に、三平行線を以て、山形文を繰返し、その各山頂に一突起珠文をおき、平行線の左右には、丸く押せる珠文を以て緣取れり。

(67) 急須形土器

完形をなせる優品なり。口緣部及び肩部に或は刻み文又は凸起文を施して變化自在ならしめ、文樣は所謂口造り及底の二部に施せり。共に磨り消し文にして、口造りに於いては、四弧線を以て緩かに之を包み、その弧線の先端を施轉せしめて相對せしめしは、この種文樣に普通見る手法なり。底部の文樣は全區を二區に分かつて、之に相對稱せる曲線文を描かんと企てしが如きも、施文の當時に別に型等を用ひず、自由畫にせしが如きを以て、細部に於いては、相一致せざるものあり、殊に圖版上部拓本に於て示せるところにては、上下におかれたる一單元區が大きさを異にせるが如きは、その孰れかが、施文の最後となつて、殘されたる區劃序期より小さくせるか、又は大きくなれるかを示せるものならん。而して、各相對せる單元か、中軸を以て左右方向を反對にせるは、先きにも屬ょ注意せるが如く、石器時代土器文樣に見る一特徴なりとす。

(68) 鉢形土器

現所藏者の先考が靑森縣在任中獲られしものなりといふを以て、その發見地も恐らく靑森縣にあらん。薄手なり。口緣部に近く、三ヶ所に小形の耳を突出せしは、或は厚手土器に見る大形の耳の形式遺存せるものとも見るを得べし。口緣部には刻み文を施し、胴部に磨り消し文を描けり。帶文樣の手法をとり、各一帶に於いて、二單元を以て組み合せたるも、細部に於いては、必ずしも相一致せざるは、この種文樣に見るところとす。全體黑み勝ちにして質脆弱なり。

(69) 皿形土器

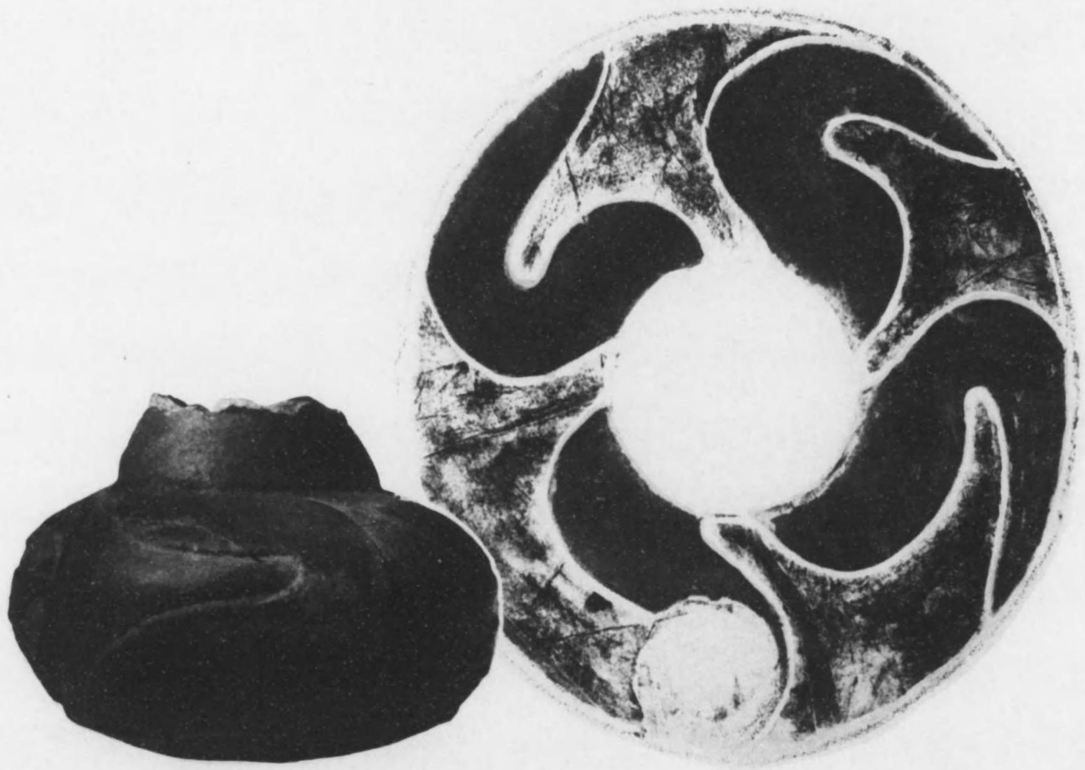
外形に於いて整、文樣を胴部及底部のすべてに施して、更にその美を增せり。胴部の文樣は、繰り返しの手法をとり、同一單元を七回繰返せり。圓を七等分するは、相當困難なるべきに、之を敢へてせる石器時代人の器用さを見るべく、而して繰り返せる文樣も、細部に於いては、相一致せざるものあり。底部は不規則に文樣を配せり。

(70) 鉢形土器及土器殘片

鉢形土器は、縄文地に兩眼を並べしが如き圖を描けり。孤線を集めて作りし結果、偶然現はれしものとも解し得べきも、かの支那に見る饕餮文の如く、兩眼を著しく描きしものとも見るを得べきか。土器破片は、突文を以て、貞線文を描けるは、稀に見る手法といふべく、破片なるも、原始文樣として極めて注意すべきものならん。

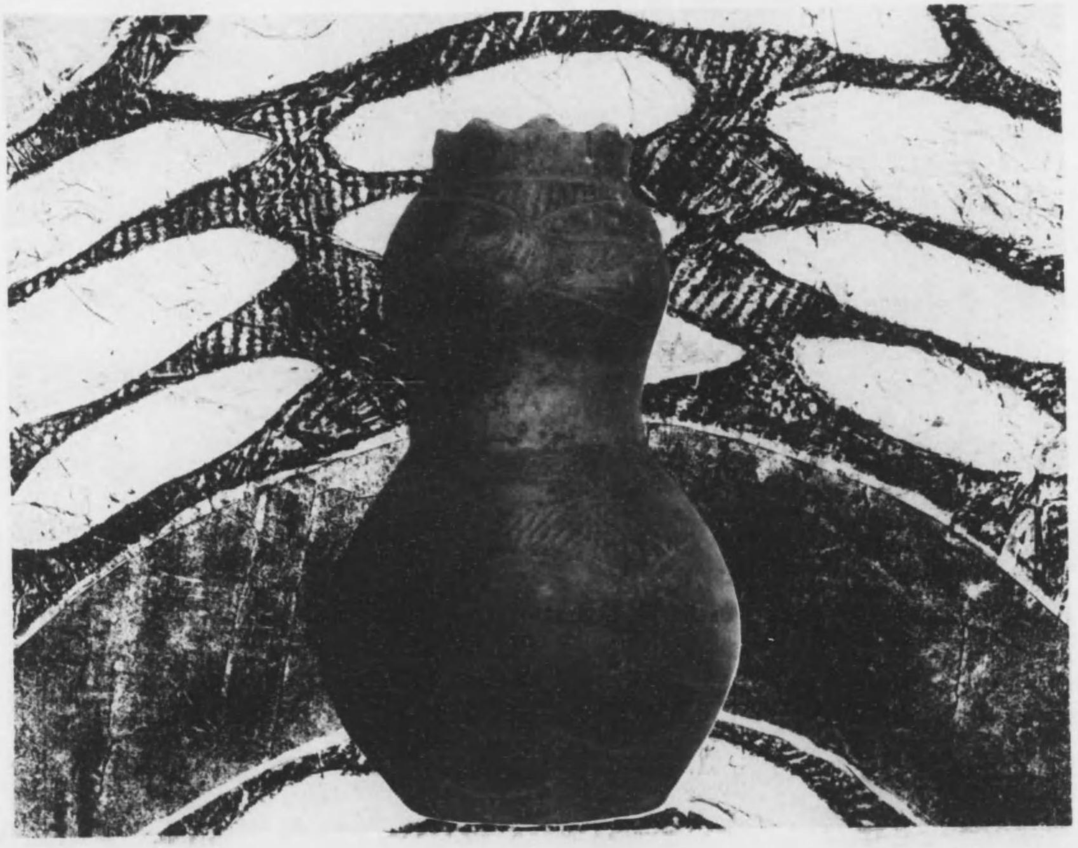
土器壺形

（見發掘ヶ宮地各地字大村地各前郡生桃園前陸）



（陸前　雲雀原次郎氏藏）

器土形瓢
（詳未地見發）



（東京帝國大學理學部人類學教室藏）

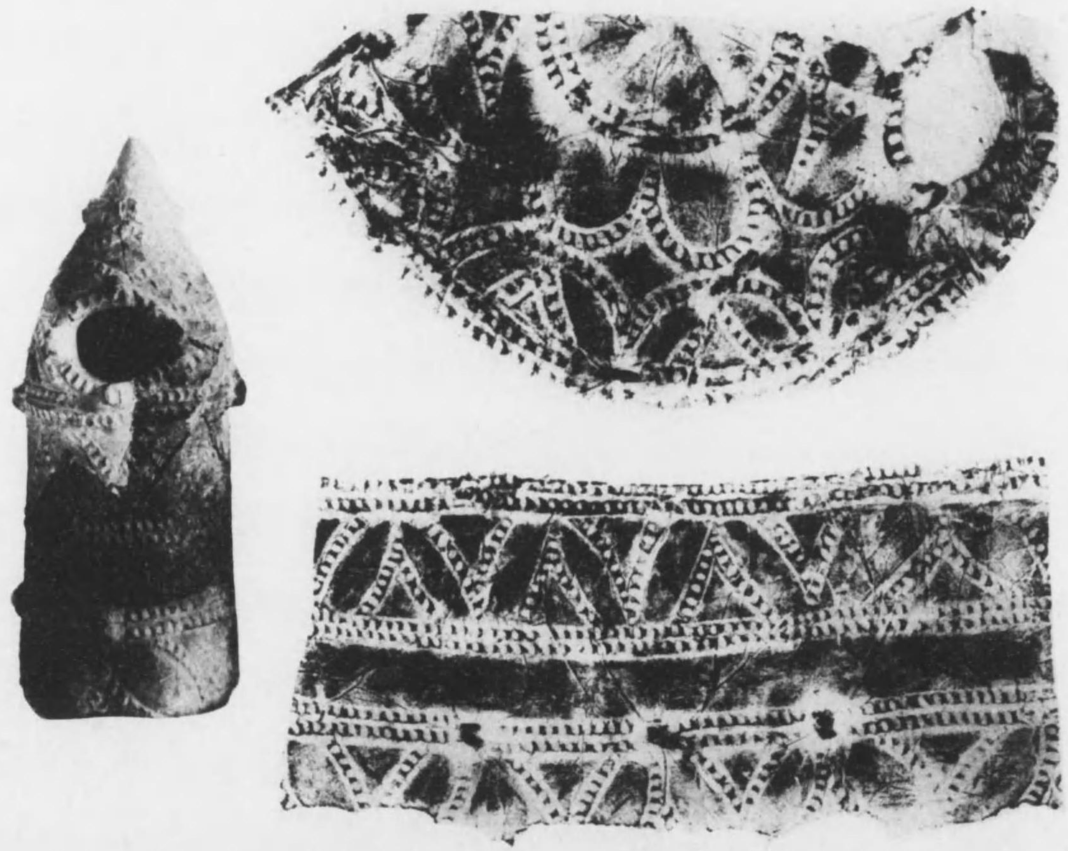
器土形瓶

（見仮澤面十字村野崎郡羅津中國奥地）

（神戸 久原房之助氏藏）

器土形家

（其發掘地點大部分在四平大村貴重大部發掘遺物來）



（現在下關共濟會藏）

鉢形土器

(下總國千葉郡誉田村名付小金澤六通發見)

(東京 上羽貞幸氏藏)

器土形壺

（見曾谷息小郡澤遺國中陸）

（大阪 木山彦一氏藏）

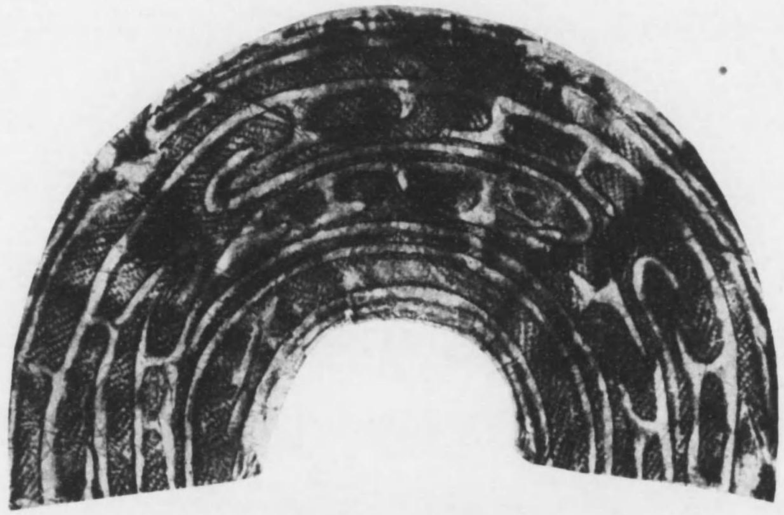
器土形須急

（兵庫内後十字村野原前田津中国鳥路）

（神戸　久原房之助氏蔵）

土器形鉢

（カ見登國奥陸）



（東京　佐和秀柱氏藏）

器 土 形 皿

（見發內陸十字村野銀郡信津中國奥陆）

（藏氏助之原久 尸鈴）

鉢形土器及土器殘片

（見發掘貝塚部落址遺物）

（鉢形土器 陸前 遠藤源七氏藏
土器殘片 陸前 毛利總七郎氏藏）

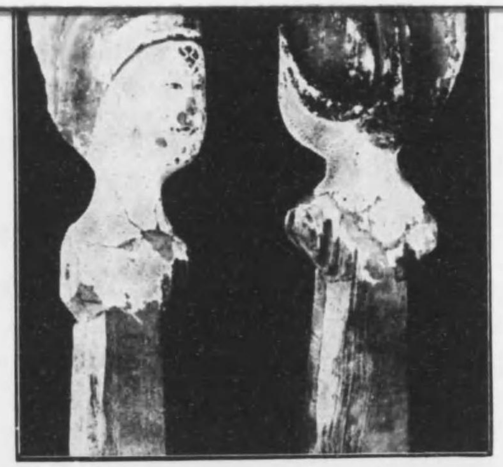
本圖集內容の壹部縮寫見本（實物各圖縱九寸横六寸五分）

唐代女子像

（支那新疆省和卓發掘）

環頭柄頭

朝鮮鐘



環頭柄頭

朝鮮鐘

考古圖集

第二期
會員募集

考古圖集は考古學研究者及び藝術家研究資料の爲めに大正九年考古學會に於て第一輯を發行して玆に第三拾六輯の版を重ねました然るに同會に於ては編者の遲帶勝ちなるにもかゝはらず號を追ふて會員の數を增し今日に於ては片手間て之を處理することが困難になりましたから第三十六輯を一段落として發行に關する庶務一切を工藝美術研究會に於て任し考古學會に於ては專ら編輯にのみ任することに致しました而してこれを期として第二期に移り一層體裁面目を更め斯學研究者の翹望に酬ひたいと思います。

大正十三年六月　日

考古學會
工藝美術研究會

考古圖集第二期規定

一　本圖集は一定の組織に基き上代より奈良時代以降の文化を徵すべき遺蹟遺物且つ我が文化の交渉を有する支那及び各地にも亙らんことを期す。

二　本圖集は每輯四六倍判大のコロタイプ圖版拾葉を以て一輯とし每月壹輯を刊行し每輯解說書を添附す。圖版の都合上木版或は三色版を應用することあるべし。

三　本圖集は拾貳輯を以て第一期とし大正十三年六月より大正十四年五月迄を第二期刊行期間とす。

四　本圖集會費左の如し。

壹時納入　金十六圓五十錢
十二回分納　金一圓五十錢

五　本圖集を購讀せんとする人々は所定の申込書に會費全期分又は第一回分を添へ其旨本會へ申込まるべし。但し諸官衙及官公立學校圖書館等は會費後拂特別扱の請求に應ず。

考古圖集第二期第一輯（上毛古代文化號）

○最近發見せられ學界の新記錄をつくる巴形銅器・柄形銅器・銅鏃
○鏡類・上野發見の優秀鏡及び特色ある鏡鑑十面
○保渡田西光寺廢馬具・有名なるものにして優に國寶の價値あり。
○環頭柄頭六種　○古墳發見最大と稱せらる頭推太刀及倒珊形鐔數種、中に銀象嵌のもの二種、
○石製品數種、極めて特色あるものゝみを蒐めたり、
○透彫金具　支那文具の影響を見るべきもの、
○埴輪　埴輪上偶中の最優品と稱せらるゝもの、

◎急告

從來發行したる考古圖集第一輯より第三十六輯まで取揃ひ特に高雅なる裝釘二卷とし貴需に應ずることゝせり。但し部數僅少に付御希望の方は至急御申込ありたし　**特價貳拾五圓**

申込所　東京市牛込區矢來町三番地　工藝美術研究會　振替東京四一〇二四番　振替長野三五二一番

申込所　東京市本郷區龍岡町三十一番地　聚精堂　振替東京三〇五八番

原始文様集刊行の趣旨

文様の研究は古代の文化を語るものとして極めて重要なる地位を占むるのである。古代民族は彼等の思想をその文様藝術の上に如何に表現してゐたか、彼等の生んだ藝術は果して如何なるものであつたか、これらの検討はたしかに興味ある問題であらねばならぬ。而して歐米人も讃嘆して止まぬ我が文様の中に於ても、石器時代になつたものは一種の異彩を放つてゐる。啻にそれが原始的な氣分に溢れてゐるといふだけではない。その手法に於ても原理に協ひ、組立に於いても現代人の到達し得た域に到達してゐるのに驚かされるであらう。隨てこれが研究は好事家の好奇心を滿足させるのみではなく、其特色は必ずやよく現代の行き詰つた文様に清新にして該切なる刺戟と暗示を與へるであらう。

東京帝國大學教授文學博士鳥居龍藏氏及び東京帝室博物館歴史課長高橋健自氏は本圖集の編輯監督として其蘊蓄を傾注せらるゝのみならず、尚京都帝國大學教授文學博士濱田耕作氏も亦多大なる援助を與へらるゝが故に、本圖集はよく其完璧を期するを得、材料としては日本の隅々に亙つて其古代表作を蒐集し、且これが實物の寫眞と文様の剖展とを掲げ、以て、手法の上に於いても組み立に於いても遺憾なき程度の紹介を試んとするものであつて、藝術並に文化の上に稗益すること多大なるべきは吾人の確信することである。

原始文様集刊行規定

第一款 本圖集は一定の組織に基き原始時代の石器、土器文様を系統的に蒐集して寫眞圖及拓本をコロタイプにて印刷するものとす

第二款 本圖は毎葉四六倍判大のコロタイプ圖版拾葉を以て壹輯を刊行す

第三款 本圖は拾二輯を以て原始時代寶の完結として大正十二年十一月より大正十二年十月迄を其刊行期間とす

第四款 本圖集は非賣品にして會員にのみ頒布するものとす

第五款 本圖集は毎輯解説書を添附す

本會々員たらんとする人々は所定の申込書に會費全期分又は第一回分を添へ其旨本會へ申込まるべし

但し諸官衙官公立學校圖書館等は會費後拂特別扱の請求に應ず

第六款 本會々費左の如し

壹時納入　金拾六圓五拾錢

拾回納入　金壹圓五拾錢

送金は成るべく振替口座東京四一〇二四番へ繰込まるべし

大正十三年五月廿五日印刷
大正十三年五月三十日發行
（第七輯）
東京市牛込區市ヶ谷河田町十一番地
編輯者　杉山壽榮男
發行兼印刷者　工藝美術研究會
東京市牛込區矢來町三番地
右代表者　田村壯次郎
東京市本郷區湯島四丁目二十番地
印刷所　大塚巧藝社
東京市牛込區矢來町三番地
發行所　工藝美術研究會
振替東京四一〇二四番
郵税長野三五二一番

不許複製

終